

初期鉄器時代と初期ローマ時代のテル・レヘシュ —イスラエル、テル・レヘシュ第13次発掘調査(2023年)—

桑原 久男 天理大学文学部教授
間舎 裕生 東京文化財研究所文化遺産国際協力センター客員研究員
橋本 英将 天理大学文学部教授
山野 貴彦 聖公会神学院専任教員

Tel Rekhash in the Early Iron Age and Early Roman Period: Excavation at Tel Rekhash, Israel (2023)

KUWABARA, Hisao Professor, Tenri University
KANSHA, Hiroo Visiting Researcher, Japan Center for International Cooperation in Conservation, Tokyo National Research Institute
for Cultural Properties
HASHIMOTO, Hidemasa Professor, Tenri University
YAMANO, Takahiko Faculty Member, The Central Theological College

初期鉄器時代と初期ローマ時代のテル・レヘシュ—イスラエル、テル・レヘシュ第13次発掘調査(2023年)—

1. はじめに

テル・レヘシュは現在のイスラエル国北部、ガリラヤ地方に位置する面積約4.5 haの遺跡で、東方以外の三方を川に囲まれている。考古学・歴史学・聖書学などのスタッフで構成されたテル・レヘシュ発掘調査団による発掘調査が進められ、第Ⅰ期発掘調査(2006～2010年、第1次～第6次、団長：置田雅昭・月本昭男)では、青銅器時代からローマ時代までのほぼすべての期間を通して、居住の痕跡が確認され、テルの頂部(アクロポリス)に焦点を当てた第Ⅱ期発掘調査(2013～2017年、第7次～第11次、団長：桑原久男)では後期鉄器時代の複合建造物の構造が解明されるとともに、ローマ時代に建造されたユダヤ教会堂遺構の存在が明らかになった。第Ⅲ期発掘調査(2019年～、第12次～、団長：桑原久男)では、①後期青銅器時代から鉄器時代への移行期における同遺跡の様相、および②ユダヤ教会堂とその周辺の建物との関係性を明らかにすることを目的とし、「下の町」での本格的な発掘調査を開始した。今回、イスラエル考古局よりライセンスを得て、2023年8月10日～9月3日(遺物整理期間を含む)、第13次発掘調査を4年ぶりに実施することができたので、その成果を報告することとしたい。

2. 調査区(図1)

上記2つの調査目的のうち、①については遺跡北西麓に広がるテラス状の「下の町」西端部において

2019年に実施した調査を継続した(J地区)。「下の町」ではこれまでの調査において青銅器時代の豊かな層が検出されており、新王国エジプトの文字資料や旧約聖書に言及のある「アナハラト」と呼ばれる都市に比定されているテル・レヘシュの歴史の一端を解明することが期待される。今年度は、2019年の調査の段階で初期鉄器時代の層に到達しつつあると想定された、調査区西部の4グリッド(F3、F4、G2、G3)に集中して調査を行った。また、調査目的②については、調査前の段階で地表に石列の露出が認められた、ユダヤ教会堂遺構の南東部に隣接する箇所(G地区)の2グリッド(D4d8、D4e8)について、発掘調査を行った。

3. J地区(図2)

3-1. G2/3グリッド

G2グリッドでは、2019年調査の段階で直交する2本の壁(W6043、W6049。幅各60 cm)と、その入隅部のタブン(L6046)が出土していた。東接するG3グリッドでは、W6049の延長と思われる壁(W6047)および、その周辺からは動物骨を大量に含む堆積土(L6023)が検出されていた。出土土器から、これらの壁を伴う建物は初期鉄器時代に属すると考えられており、今年度は床を検出することを目的として調査を行った。

まずは両グリッド間の畔(L6050)を撤去したところ、当初の想定通りW6047とW6049は一連の壁であることが明らかとなった。最終的にこの壁はG3グリッド

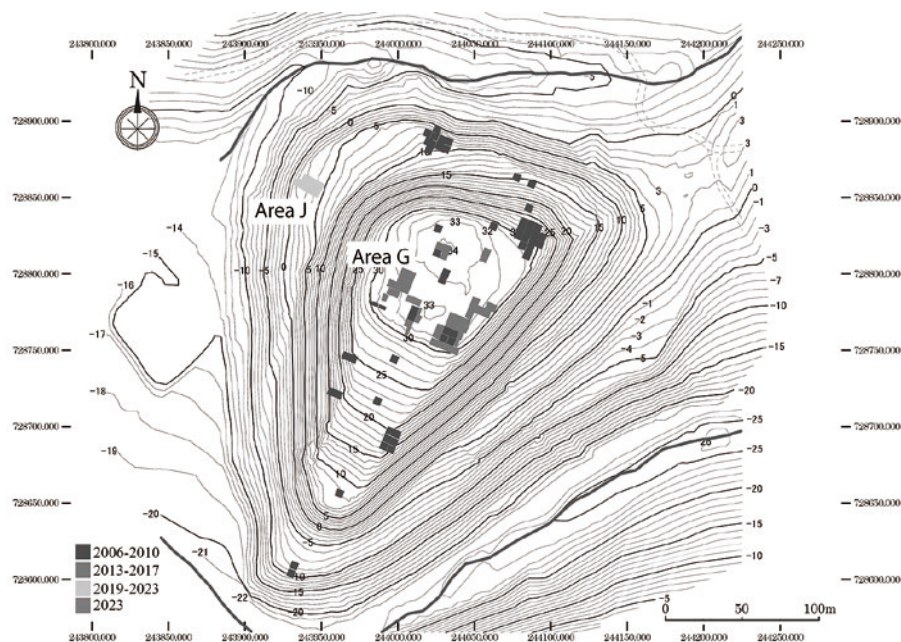


図1 テル・レヘシュの発掘調査区

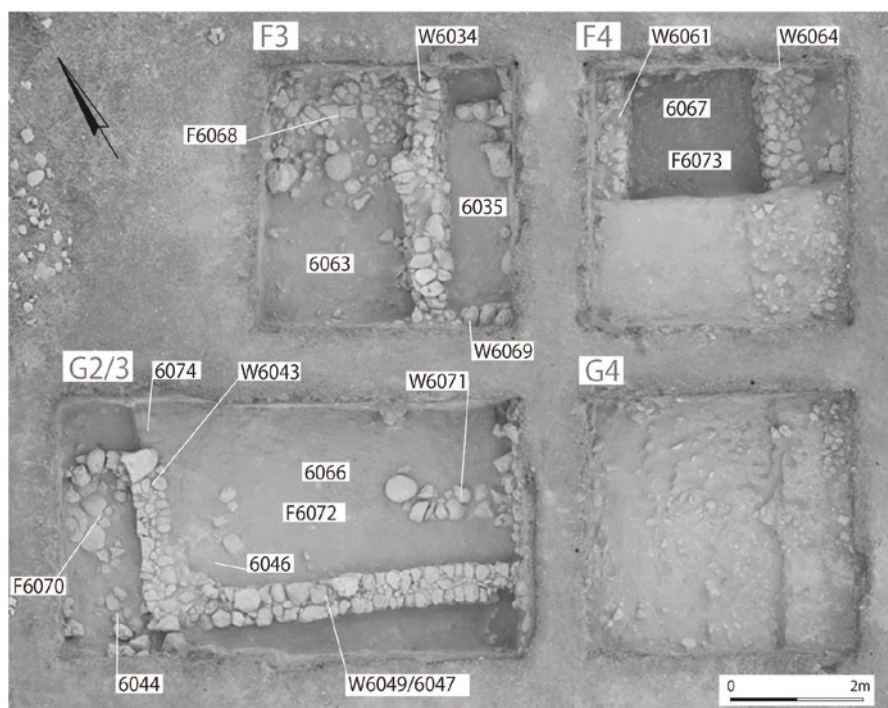


図2 J地区の発掘調査

東端まで延長し、さらに東方へ続いていることが確認された。検出された部分だけでも約 5.5 m の長さがあり、かなり大規模な建物の一部であると思われる。これらの壁と関連する覆土 (L6062) には大量の土器片と動物骨が含まれており、上述した 2019 年調査の状況と一致する。

これらの壁の内側の床 (F6072) は、標高 1.1 m の地点から出土した。これは土間の床であり、2019 年度

に出土したタブン (L6046) はこの床に設置されたものであった。この床直上の堆積 (L6066) からは初期鉄器時代の土器片が検出された。グリッド東端からは粗く石を並べた東西方向の石列 (W6071) が出土しており、間仕切り壁のようなものであったのかもしれない。W6071 西端には直径 50 cm 程度の円形の石が据えられており、柱の礎石であった可能性もある。

この一方で、W6047 + 6049 以南からは同様の床面

は検出されなかった(L6058)。W6043以西からは石敷と思われるもの(F6070)が出土したが、その標高はF6072よりも30 cmほど低い。グリッド北面の土層断面図を見ると、F6072と同質の土がW6043以西にもほぼ水平に連続しているため、石敷F6070はF6072を含む建物よりも先んじるものであると思われる。F6070の覆土(L6044)からも大量の土器片や動物骨が出土している。また、W6043はひときわ大きな石材を北端部に据え、それより北には続かなかったため、この部分が建物の出入り口部分であると考えられる(L6074)。

注目されるのは、W6043・W6049/6047の内外から、るつぽ(取瓶)片(L6044・6051・6062)、ふいご羽口の破片(L6062)といった青銅器鑄造関連遺物が集中して出土したことである(図3)。今後、詳細な検討が望まれる。

3-2. F3 グリッド

F3グリッドからは、2019年調査において南北方向の壁(W6034)が出土しており、テル上方からの土圧により若干歪んでいるものの、W6043と平行に見えるため、これらは同一の建物を構成しているものと考えられていた。しかし、G2/3グリッドの調査においてその南延長部分は検出されなかった。F3—G3間の畔を撤去していないため詳細は分からないが、出土標高からW6034はG2/3グリッド出土遺構よりも後の時代のものである可能性がある。グリッド南東隅付近からはW6034に直交するような石列(W6069)が検出されており、これらは一連の構造であると考えられる。W6034の下端は今年度の調査においても確認できていないが、現段階において深さ1 m程度が検出されており、かなり大規模な壁である。グリッド北西隅部からは、この壁に接続するような石敷き(F6068)が出土した。石敷き南端部には円形の石材が2段積まれており、柱の礎石であったかもしれない。この石敷き上からは、玄武岩製の容器の破片が出土した。F6068の標高はF6072とほぼ同一(1.1 m)であり、両者は同時期である可能性が高い。

3-3. F4 グリッド

F4グリッドは、2019年の調査において表土直下の土層の堆積(L6007)が見られたのみで目立った遺構の検出がなかったため、テル・レヘシュ「下の町」の基本層序を把握するための試掘を行うこととし、グリッ

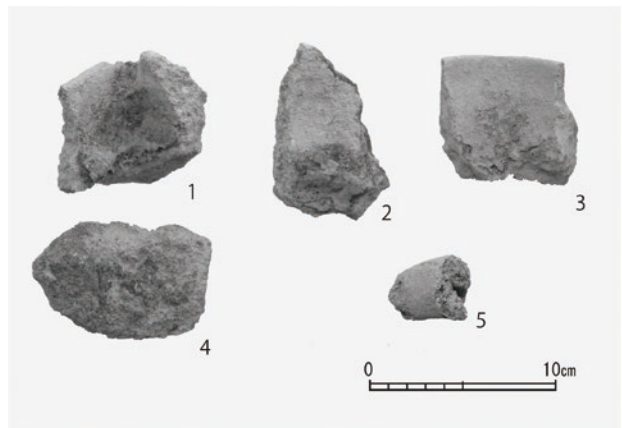


図3 青銅器鑄造関連遺物

ド北半の南北2 m、東西4 mの範囲を掘り下げた。

遺構としては、まず標高2.2 mを天端としてW6061が出土した。これは調査区の南北壁に平行な壁で、グリッド西セクションに入り込んでいるために全体像は明らかでないが、発掘された範囲において幅45 cm(2列)、深さは100 cm(7段)を測る。またグリッド東部からは、同様に調査区南北壁と平行なW6064が標高2.1 mを天端として出土した。こちらも幅50 cm、深さ90 cmと大規模なものである。W6064は垂直ではなく若干の傾斜がつけられている点、外面(西面)は緻密に造られている半面、内面(東面)の境界が不明瞭である点などから、上部構造を支えるための基礎というよりは、土留めのための擁壁のようなものであったかもしれない。ただし、いずれの壁も狭い調査区内での検出にとどまっており、現段階で詳細を議論することはできない。

堆積土としては、先述の表土直下の土層(L6007)とほぼ同質の土層(L6052)が確認された後、上述の壁の検出に伴い随時ローカスを変更したが(L6060、L6065)、調査中には目立った土質の変化を把握することはできなかった。いずれも粗い土の堆積層で、後期青銅器時代～鉄器時代の土器や動物骨を大量に含んでいた。

調査終了の段階で、標高1.2 mの地点から細かい砂利を敷いた床(F6073)に到達した。床直上の堆積(L6067)にはケルノスの断片を含む後期青銅器時代～初期鉄器時代の土器片が多く含まれており、この床が形成された時期を示していると考えられる。なお、F6073はW6061とW6064に接するように造られており、これらが共存した可能性が高いが、いずれの壁もこれが下端かどうかは未確認である。

グリッド北面の土層断面を確認したところ(図4)、

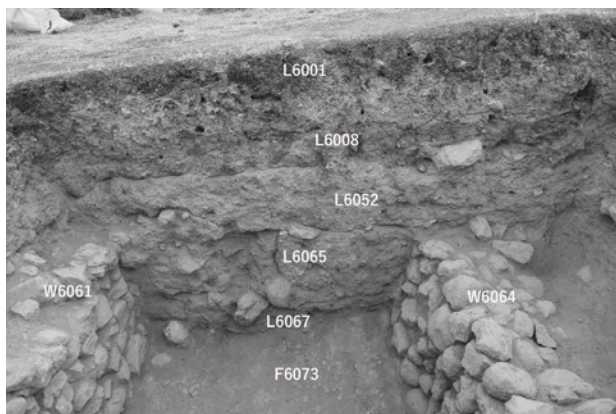


図4 F4 グリッド北セクション



図5 G地区の発掘調査

F6073直上の堆積(L6067)より上方では、W6064周辺には暗褐色の土層が認められ、崩落した日干煉瓦と思われる。W6061周辺にはこういった煉瓦層はなく、明褐色の土層が堆積しており、L6052、L6060、L6065はこれに該当すると考えられる。

4. G地区(図5)

4-1. D4e8 グリッド

D4e8グリッドでは、現地表下0.6mから2つの壁(南北壁W3518:幅1.1m、出土全長3.6m、東西壁W3529:幅1m、出土全長3m)から成る隅部が、標高31.0~31.9mにおいて検出された。W3529はW3518の南端に直交している。これらの壁の入隅部の空間(L3524:標高31.9~32.1m)からは後期鉄器時代とローマ時代の土器が検出された。L3525南部をさらに掘り下げたが(L3526)、包含される土器の性格は同じであった。これまで「上の町」において実施された調査結果を基にすると、今回出土した壁は、テル・レヘシュ頂部付近に広がっていた紀元前7~6世紀のアッシリア占領下の複合建築の一部と考えられる(図6)。複合建築の中心付近に位置していることから、これらの壁は施設内の間仕切壁のようなものであったのかもしれない。



図6 後期鉄器時代の建築遺構

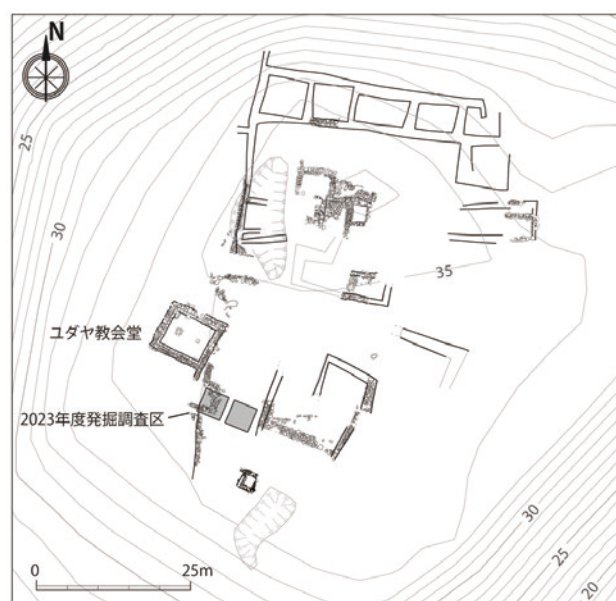


図7 ローマ時代の建築遺構

4-2. D4d8 グリッド

D4d8グリッドでは、現地表付近から2つの壁の一部が出土した(W3501、W3525)。南北壁W3501(幅1m、出土全長1m、3~4段)は、2019年調査の段階で、地表に露出していることが確認されていた。東西壁W3525は幅1m、出土全長1mである。これらの壁は、おそらく複数の部屋を持つ建物の一部と推測される。これらの壁の軸線と、これまでに出土しているユダヤ教会堂などローマ時代の建物群の軸線が一致していることから、W3501とW3525から成る建物も同じ時期に属するものと考えられる(図7)。入隅部(L3514)にも、後期鉄器時代とローマ時代の土器が混ざった覆土が堆積していたが、床には到達していない。出隅部の空間(L3523)からは、調理鍋やキャセロール、貯蔵用土器や水差しなどを含む大量のローマ時代の土

器が出土した。注目すべきは、石灰石製容器の破片が複数点出土したことであり、これはユダヤ人の共同体が存在した指標となり得るであろう。D4e8 グリッドにおいては、いわゆる「ヘロディアン・ランプ」の注口部も採集されている。

5. まとめ

今期の調査によって、「下の町」においては後期青銅器時代から鉄器時代初期にかけての連続する層序が出土しつつある。今後も調査を継続することによって、これらの時期のテル・レヘシュの性格だけでなく、同遺跡の所在する下ガリラヤ地方における位置づけなども明らかにすることが期待される。「上の町」においては後期鉄器時代の要塞建築に付随すると思われる建物の一部、初期ローマ時代のユダヤ人集落の一部などが出土し、テル・レヘシュが長年にわたって重要な場所であり続けたことが明らかになりつつある。

今回の調査参加者は報告者のほか、長谷川修一(立教大学)、イツハク・パズ(イスラエル考古局)、小野

塚拓造(東京国立博物館)、津本英利(古代オリエント博物館)、山内紀嗣(生駒ふるさとミュージアム)、永田琴子(立教大学大学院)、瀬川裕太郎(京都府立大学大学院)、森河明音(筑波大学大学院)、日本・イスラエルのボランティア 30 名、遺跡近郊のミスル村の作業員であった。

なお、本調査は科学研究費補助金(課題番号 22H00730—桑原久男、課題番号 20K01110—橋本英将、課題番号 21K00981—小野塚拓造、課題番号 20H00004—市川裕)、および学術研究振興資金(桑原久男)による成果の一部である。

■参考文献

- ・ Aharoni, Y. 1967 Anaharath. *Journal of Near Eastern Studies* 26, 212-215.
- ・ Paz, Y. et al. 2010 Excavations at Tel Rekhes, *Israel Exploration Journal* 60, 22-40.
- ・ 桑原久男・間舎裕生・橋本英将 2020「アナハラの歴史解明へ向けて—イスラエル、テル・レヘシュ第12次発掘調査(2019年)—」『第27回西アジア発掘調査報告会報告集』31-34頁 日本西アジア考古学会。